

## 礁池内のサンゴ群集再生の検討について

石西礁湖のサンゴ礁は、これまでオニヒトデの大発生や近年頻繁に生じる夏季の高水温に伴う白化現象により衰退傾向にある。

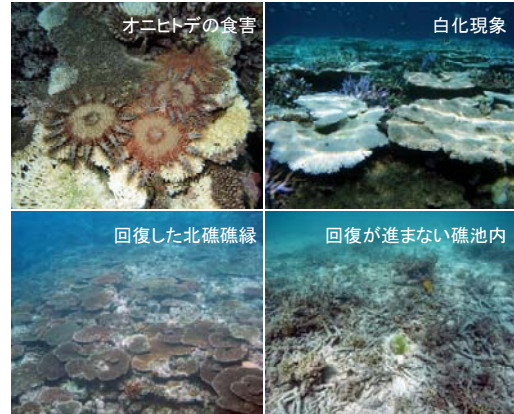
衰退後のサンゴ群集の回復については、礁斜面では、場所による差が大きいものの、自然の幼生加入により、卓状サンゴを中心とした群集が白化前の水準まで回復した場所（北礁、浦底湾等）もあることが報告されている（林原；2007、岡本；2010）。

一方、礁池内については、過去に被度 50%以上の枝状サンゴ群集が広範囲にみられたものの、1980年代に起こったオニヒトデの大発生により大半が失われ、その多くは砂地や礫地となり、未だに回復していないことが報告されている（環境省自然環境局；2007）。

このような枝状サンゴ群集は、かつてはハタ類やブダイ類の漁場として重要な場所であったが、今では漁場として使われなくなり、八重山におけるこれらの漁獲量減少もこれらが一因となっている可能性が指摘されている（林原；2009）。

一般的に砂礫底に分布する枝状サンゴ群集は、破片分散・成長を繰り返しながら群集形成するのに伴い、生息基盤となる砂礫底が安定化し、サンゴ幼生加入後に安定して成長できる着床基盤が創出されると予想される。

しかし、現在、砂礫底に分布する枝状サンゴは小型のサンゴがほとんどであり、高波浪時に破損や埋没を繰り返し、広範囲の群集や着床・生息基盤の形成は進んでいないと考えられることから、礁池内においても、着床基盤の安定化といった対策を進める必要があるのではないかと考えられる。



### 引用文献

- 1) 林原, 2007. 幼生放流によるサンゴ群集の修復技術. みどりいし(18):7-11
- 2) 林原, 2009. サンゴ群集の修復技術-石西礁湖と阿嘉島、それぞれに適した再生戦略は?- みどりいし(20):9-13
- 3) 岡本, 2010. 石西礁湖における 1998 年白化以降のクシハダミドリイシの死滅と回復過程, 日本サンゴ礁学会第 13 回大会講演要旨集:25
- 4) 環境省自然環境局, 2007. 平成 16 年度石西礁湖自然再生調査報告書